

朝夷巡嶋記

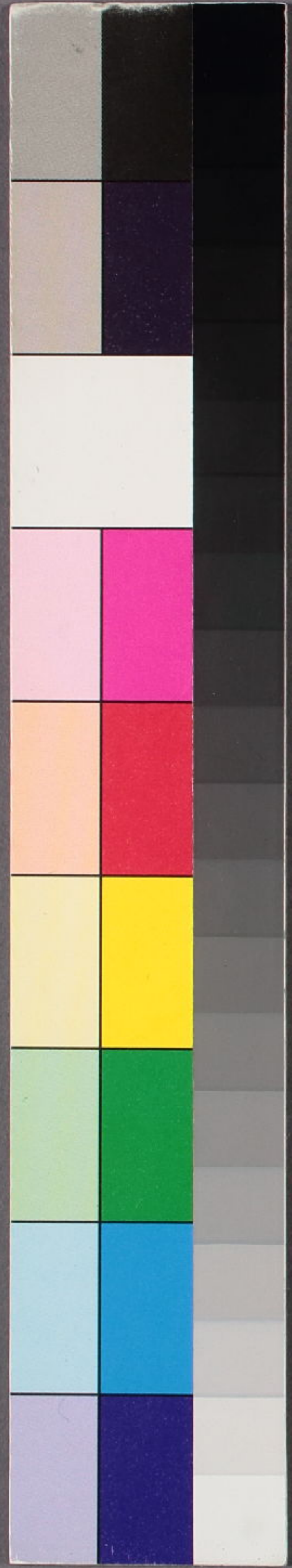
第六編

卷三

13

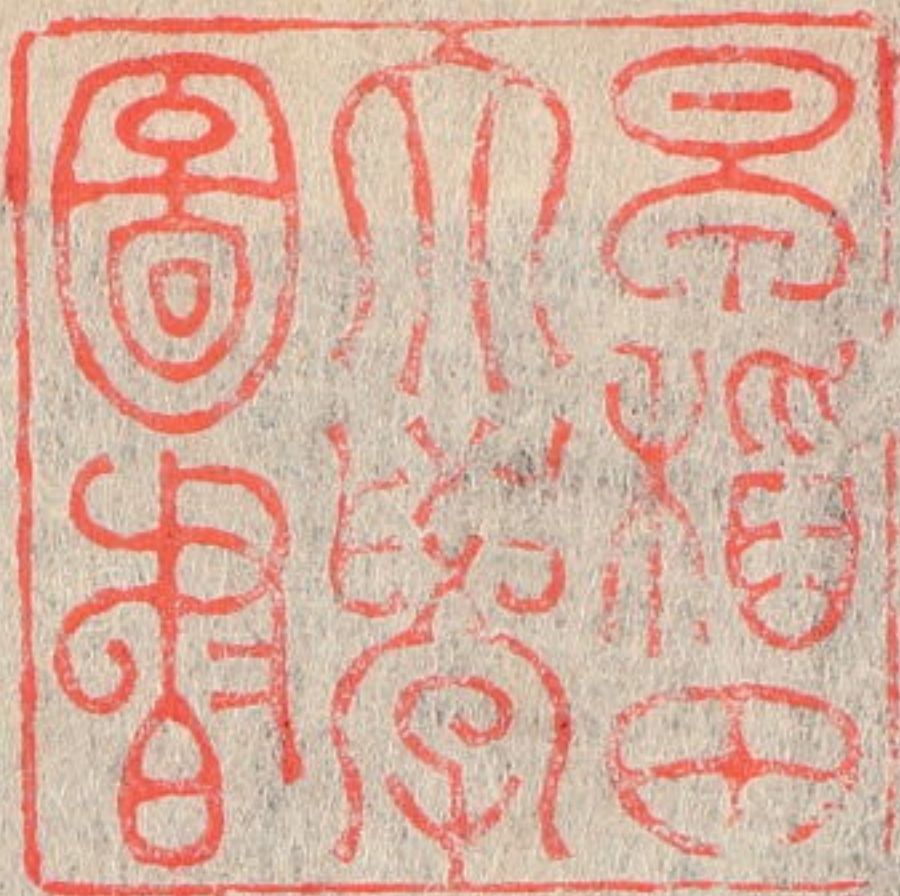
704

28





門 704  
諸 卷 28



明治三六年  
十月九日  
購求

朝夷巡嶋記全傳第六編卷之三

東都 曲亭主人編輯

家廟投入花

後輯第五十二

弟迎常葉枝

再説稲向判五の義秀一三共侶小田鶴媛の亡體とんんとて立んとせむる  
程よ次の間小入りのち咳む、韓楮の隔亮とやと推初うくとては是  
別人るらむ廣光が妻浅良井へ當下判五三ホハ故馬なり又歎ひて誰るらん  
とどひよ小三二との母御よて七おん身も恙心るる、秋大慈の息子のいふを  
圖らばりけるけの騷動殊さう女儀之稚児之側杖打れぬを、とては小の  
祐どもこれ彼吉のる月敏くこと同暇るる、とては浅良井小膝を進め否  
小三次も恙るく、庵福のくふはるか、とては郷小御内なる人々が殺立て

月報六編卷三



ひとりも危く見え一折加勢を請んと思ひ、ふ小三が身を援て背門より出て彼  
 此の里人小よりと告駈催してのり来ぬれと朝夷ぬの武勇をうて彼同類  
 る草賊ホハ一箇も送らぬ敷を殺されて又彼鐵盾矢藤五も幸して逃亡  
 するも折つるのるれが里人達をそが俵の背門より下へ降り死して又御内  
 人の浅疾をみるものれれを勅りて膏背を打せゆり又草賊ホが亡骸を  
 して出さる鮮血の汚穢をのちと洗拭のせるとせし程は聊時も程り  
 こそ里ノ示を還する件の事の趣を報せんと思ひつ次の間をまよまれ  
 ど朝夷ぬと物くつひの最中をのりければ言葉の腰を折らんとひとり彼  
 外はゆり一申斐ふ朝夷ぬのうへも同じとよくゆえり。今さらとへ誰か  
 も危りけ禍鬼を斬くうちも襪れれば御内なる人々も命を限せぬの  
 けりむその勢がよひえと只痛く幼くさるものとひの眼包を推拭ひく。

義秀のうち對ひ絶て久れた朝夷ぬ。この夫主役の危窮をまぐ救れ  
 る恩義の須弥より高くそく。その母子が二とせこの縁小連を退曾  
 庇伏の巨海よりる尾深り。今まそめぬとさう折よくあまゆせめて、  
 多別は盜賊を敷を拂ひひひの歎たの中を救ひの再會にせゆられと只  
 管稱て已ざりしを義秀のゆめむとて念をたてたを竹のわんを去旅より  
 身の内つゝの大きるるぬとさう。窈窕もえを先めて、杖のよもむの勤死  
 響小危窮を拯んとし里人を駈催せし。現その才覚ありあり是は武士の  
 妻ありと嘆賞されば一二も判五も共々感嘆とてそれのさるる月の  
 友鶴が長た病著又身まより一裏の事まぐ決負られることとさう。うちつぎ  
 する幸るる。この人のさの微のせがひつた。このさるるよれ趣舎を致し  
 づくと報るをゆて義秀のいよく稱賛をりける。さうなる程まもる黄氏時



ろり一六判五の左右をえろていつまきかそめを孫が亡骸を存すま誘  
 めとそ身と起せ衆皆齊一うち列直く縁頬より出入とるまああ庭下  
 駄一雙の判五のちこれをも朝夷ゆ先出我三人の背門より  
 遣らんを躬てくせが浅良井も二三も後方小跟て退きけは雨程小  
 義秀のそが庭ゆち出て巻石傳ひのちと樹植は添ぞ只ひち乾淨  
 房は赴け打抜れる障子の隙より燈火の光幽る彼持佛のわあ  
 ろんとどひやを近つけども判五ホのまをそ義秀の性急なればひち  
 縁頬を登り障子を颯落哩と推開て進み入らんとする程まひかけ  
 るた一箇の女僧が嬰兒抱きて前向小立ち義秀うちとち敬馬たの母れ  
 圖らざりる對面何の程よりこの処おあひけんといせも果む右ま爪縋  
 敷珠ぬり揚て下々幾矢とち居て涙又曇る声を戦別れそよりち四

歳雨を月れ日小照されて昔の涙あつるに旅宿おのて寝られをえん  
 目ある月親とえられの不思議さより乳母を推せ乳母を親とい  
 ろのけるうねもいらぬ涙ぬけぬる實の母君鞠繪内前より代  
 折檻の數珠の親佛と佛の慈悲智者あも千慮の一失あり愚者あも一  
 得るもをわいと候もあつる葉もが拙死辭も取らぬんと亡母君の教訓  
 ほどとる願も哀れな言のいこまるとも海もあつる受容てつらくと  
 啼あう一年來巡り四々をたの風声隱もさしけれがと頼くは日も  
 あり又わると危この曾安くぬ日もまををいふを問れば初安房あて  
 別きて折れぬいこのを遣脱て船堀親子鈍佛ホと慶會あひるその  
 養育の恩義の爲め勇敢傳るといふも鎌倉大和田殿といふ歴と  
 する公多君の亡母君の遺訓を多千金の身を能く単身かく衆



係無言ふらち向ひぬひの偏小無謀の血氣よきぞ。其の言へるはゆたか。  
 之れのもろくそいふ年あつた宿りと投んとく人由の事。武勇三味山玉磨平  
 太ホッ山寒へひとり趣を衆悪と妻はひひも畢竟を折救ひたり。ゆ  
 め小喜又えがて聊との甲斐あるふ似れ初へ迷ふ事よりさければ仇快ふ  
 其の類く大勇あめむぞ。有右而圖らる環の會ふ一二ぬ。嫌嫉せ  
 れてその女児を取らる。その有身しを知りて下野を邂逅する友戀。素  
 遭んとて心づよもゆり捨て出ぬ。罪人となりあつた。そのあしき漸く  
 冤枉釋てもる。妻奴とくなく。只友人を救ふ。生死を爭ふ陸奥の戦  
 場よ。其のあひより真愛の地ぬ。妻子の想死とをせぬ。再度の討ちの  
 攻煩ふる。兇賊経任を敵と捕と録倉殿のあひ。小國の毒毒と共拂ひ。吉見  
 冠者。救ひ出して為る。恥辱と雪められ。勢ひ已と。はげりけん。勇士の本意

る。それとも彼地を先仲ぬの相伴人といふれ。録倉殿よりいさ。徴れ。父  
 義盛も古く。その推して。要する。と袖振拂。陣中より脱れ。さあひ。  
 久光仲ぬ。他の功と籍と。うとく罪せられ。吉見冠者も。ゆる筋。之の列を  
 禁錮せられ。そのえ。咎む。一條の。そのあひ。め。あれ。彼人々と共侶。  
 録倉。あひ。談好口と。因く。もう。圖く。と。彼人々の。資。と。あひ。言  
 ころん。志の。あひ。高。た。名。を取。た。この。と。あひ。あ。秋。已。と。際。く。せん。と。その。友。達。と  
 苦。ひ。の。鄙。語。の。佛。造。り。と。魂。と。入。れ。な。は。似。たり。よく。い。さ。も。あ。う。こ。ろ。人。の。怨  
 め。て。親。の。勘。當。票。たり。とも。折。を。伺。ひ。人。は。便。り。と。あ。ひ。ぬ。ま。も。我。遍。と。く。勸。解  
 る。子。の。道。を。う。む。況。と。あ。ひ。の。行。の。と。遠。離。られ。とい。ふ。事。は。た。た。仙。た。時。ま  
 病。よ。と。て。ま。ま。公。疎。れ。多。ひ。せ。り。母。君。の。恥。ら。ひ。て。憎。り。ぬ。堪。き。り。けん。ぬ。づ。う。刃。あ  
 伏。め。ひ。れ。その。折。り。身。と。い。ふ。は。任。て。海。館。と。潜。び。出。さ。う。後。々の。事。云。云。と。仰



送さるひの安房の田舎の鉢蓋取らして世を渡らば又一生運  
 人の世も人も後つゞき多々今も頂を衝けと又脚迷言はゆるし勉學びく  
 名をも揚身をも起して鎌倉還りて親の對面せよと祈りせあひて母君の死  
 慈愛の心から此詩を傳へたりしをうち忘れてうらやまは團功ある今この時よ鎌  
 倉殿の御心算をうらやまは親の御心算と高きありあ我強死性根をら  
 直に母君の代る老の杖をうらやまの子と歌んと持たりて数珠の緒を打断  
 ら奔巡りて靈山天地の利益の絶く後の世の地獄に墮ん悲しき世に  
 捨られた世に捨てるも捨るは恩愛の實は浮むる身の安危并に女兒  
 小蔓のうらやまの後の世の障りごとくとも口はひきく世の風声も耳と歌て  
 熊野詣の道者宿との里人ともりまき道つれなまりて具は皆ゆりて  
 身の人一二ぬのうらやま友鶴とのうらやまはば小蔓の似たりなり今茲

越路を巡る序小一二ぬの音つれて縛の虚実を問べ死後時耳より  
 稻向氏二つらの親連は年来小蔓と親育の歌びものりまわしごとくせん  
 かやま死るともひを纏る浮世の塵は風立騒ぐ荒磯波や三國の浦の忘貝  
 忘れて年と歴のれをうらやま引く恩愛の綱も狂ふ蜚虫小舟とるの里の春で  
 それば折る佛支の餅配りとくわの翁は呼笛られ求むる杖を休むてよ  
 法捨の撰待宿も盡ぬ縁とよとよ一二ぬの遺世初見参の人の  
 人は海松の如けく死垂し麻の法衣の浅すた乞食波苦がうらやまこれ如此々々  
 と名告るれや知られず是非もまいつれく名告るれや父の為め小蔓がわらわ  
 恥まるべしと思ふと外うらやま女中と案内を護持佛堂に赴かるとり  
 向の数珠を接ぐらち仰瞻る新位牌の妙真女諦禪定尼建仁三年五  
 月二日孺人某氏五十五歳と讀れり又一箇の新位牌の妙孝至貞大善女



建仁三年癸亥四月十八日俗名友鶴乳名小蔓享年廿歳と誌されしが  
 あるそのいふと胸泣れ涙頻にたる路で面会の念仏も出ハテ佛の御前より  
 俯しく前後もつらむち泣きやうやうとひひしく緯の西女と且ど五月二日の  
 精霊の稲向ぬの配偶を友鶴が養母なる一至貞善女の火前水あまを  
 日向れ小母屋は嬰子の嗶声まをれ友鶴のその産めく遠く身をりへるを  
 これも音も鳴く杜鶴子で子小ぬ子引れて竊小赤く来もせざる歎  
 死をまぬは毒因心入を為報恩者と説せぬ御仏の教は情の眞罪を  
 襤褸の中より二十年往方も定るるを女児が死後逆縁の面會を  
 とど留られ身罪障工を浅すけれ阿三殿もあをのさざざ一にぬいぬも  
 ち遭のバ竊小出てもりやとく立まされと腰癱膝小ちくも軟節雜の  
 杖小離れ心地と又うち鳴くも面會の鉦も紛れぬれ母屋のくまをり

をり時ある小児の嗶声初孫る外小も自らせむ切ての心遣まゆも  
 るべ死ゆと迷はうのさく薫る香の煙も胸に満て身と云と云るまそ涙の  
 雨とさきさき澄ぬ心と黒漆の法衣の袖を絞る折く俄頃小烈は母屋の騒  
 動然れどもおん身が陸奥より帰上りて瞬間小賊徒を亡くぬらぬ彼盗  
 賊の頭深る鐵盾とちの奴がえり嬰児を掻攫く金と換んと虎狼の強  
 欲心両箇の翁は禁められて有敷系おん身も難く言葉戦ひあらしめて  
 取どくつえいおん身はゆる騷れて出もやれ起つ居つ圍く障子のあま  
 彼鐵盾が嬰児を研小攪く擲ちる勢ひ庭をうち越てその障子骨を  
 衝抜推かく投入れぬこの嬰児をものもよりのををう受留めぬ  
 わぬ物怪の幸ひ列は一点たりも恙なく嗶んとすると揺揚て蹴る乳頭を  
 含せり吸一吸く飲味とくとく休睡まぐさ覚ぬの只是この見の命運の



愛宕山 宿家 初到 倉人  
歡交 神信 録









光仲が尚井平より一と死鳥鵲川のほとりありて危窟窟とあり身は拯れる筈の  
 趣如此々と近属奥の陣中あり彼人より一と光仲が太田の社へ赴けり比  
 及ありて彼奴もどきどき死にたりありて定まる後靴を隔て解と搔く  
 心地のよりとひ死彼光仲が遺迹の口より母の汲引は依るあれらの奇遇  
 のよりと光仲の親友且その親の樋口三郎兼光とをせえられ渠が大功  
 あまの今毫毛も恩賞多く還く罪と蒙るの抑甚麻る政道也又  
 義邦の残珪片玉鎌倉君殿の宗族なり且時夏を撃捕する此度の軍功也  
 きふあり某の鎌倉の沙汰をばきま知らざりしふと其の傍に居るある人の  
 意見その義は稱する身の非を飭るふありねども郷高某が光仲ホと俱と  
 鎌倉へ来りば其の名を取んとる為ありむ親と盾衝くありもろし  
 彼経任を撃捕するの只義邦の為なりと鎌倉君殿の為をせざり死のよしと  
 始終の軍功の惟光仲の一人あり然るも某彼人々と共は鎌倉を推参人  
 功を擡取して己が譽を賣るふ似たりとどひおけれ推辞とものどもとて  
 光仲の不測の罪をぬぐはんの政吏のよしとある所為ありぬむとハ頭と  
 掉て否か身とをさしおひのせえたりとふありこれと異に光仲ぬの討めり大將と  
 伴人といれる推辞むと参るる君と重んじしる臣子の方といれられ鎌倉  
 諸君の恩賞のふ推辞するは譲らん誰の身とを依とひ  
 べ死誰の身とを礼といふ死智者も千慮の一失の愚者も千慮の一  
 得ありといひてあるものありとて死れて義秀有理と曉りて慚と頭を  
 拍るる又いふものありと韃靼の尼の死ありとて杖の納得せられる近  
 旅のありとも鎌倉までいれぬとあるけんこの田鶴といふ死人は産せりある  
 子のありとも初見参りて死すよと見えひいと懐か抱たり依りてあると



美哉秀乃のものを苦咲しくおんとする外面の判五二三流良井は聚會  
 する程とせられと會共侶に進み入るる中一二の揮毫せり微笑の衝  
 と寄りまき呼めり大儲のお懐よ能くを渡せられ先程の阿二  
 とお小言れ談義の聽き支り誰と袖を濡さぬ絶て一人もるをよと入放  
 ひの大々たるぬ田鶴との恙もあらず依り身の懐よ熟睡しくおるると  
 千々の土産と齎せしより二つとぬを牽出物箱向ぬの大喜大悦との見の  
 顔のいりけを弊の腰を折らんと會共侶は立在て久し彼首おぬひ死  
 又改めく對面とあゆみ隔る死辨の判五の膝を進めく年来噂の傳はる  
 とあつる友鶴の實の母也と知る當ゆ宿る俗人の親の憂集めくこれね湯ぬ  
 縁小を某則判五るれ昔上総に在り程の橋六と呼ばれ小兄の家督の嗣  
 たる後ハ州異ゆく路遠く假名実名同くはるが素々く訪易りしぬを

一二更にお身有り斯もあまうち取合れて昔と相譚ひ慰ほ給ひたまはれ  
 る。然るといへや田鶴媛が必死を救せぬひるお身は則昔菩薩之年來信ぶる  
 宝珠山の地藏尊のむねをいふとあむる。辱めて彼首を拜みひひ死  
 これ小就ても友鶴がけふも存命すまは彼孝行と容止の人をもく振れしを  
 誇りもせぬは涙々たる二十五日の夢の迹覺て悔した世間の花は嵐月雲  
 盈れの虧ると知りまら。悟りて思ひの迷ひをてといひけて落涙を  
 拭へ朝繪の尼も目とあむる。若く頭を低ぶますと懇切るほあん  
 辭は身を摘め哀したるの限りも恥さる。八入は侍り世渡る楫の廻りいづ  
 獨女と強褌の中より親もあむる。進ませりより年長て索て来  
 へ死ねるるねども恩と慕ふる一二ぬ。主まの子なる阿二のあまもり人  
 傳はるるあひ捨りて外あむる宿所の薨るるともあまほく門邊の邊の



けり。あつちの縁とく呼出られて誠の心操の具はあつちとくおびひり友鶴の  
 りのりもの。あつちの縁とく呼出られて誠の心操の具はあつちとくおびひり友鶴の  
 斐もろく先もて敷たを遠き形見の嬰児あ令偶のまほふ慰ゆるあよひ  
 わんどうち續たる華る。あつちの縁とく呼出られて誠の心操の具はあつちとくおびひり友鶴の  
 阿こあつちの縁とく呼出られて誠の心操の具はあつちとくおびひり友鶴の  
 過せの契りことと思ひけれ一二ぬ一ぬ別れ比まて直中一府の終ひも會  
 話のまくれごとれも亦倉卒の盡まざるゆゆも。あつちの縁とく呼出られて誠の心操の具はあつちとくおびひり友鶴の  
 その談のゆるる送の口誦のゆるる。あつちの縁とく呼出られて誠の心操の具はあつちとくおびひり友鶴の  
 吉見冠者の脚内人江三三の内室のく。浅良井とあつちの縁とく呼出られて誠の心操の具はあつちとくおびひり友鶴の  
 里は秋危の起平比より稚児連る長返曲専女代り追使れて大々真にさ  
 れる。あつちの縁とく呼出られて誠の心操の具はあつちとくおびひり友鶴の

暮春果て樹下閣涼。あつちの縁とく呼出られて誠の心操の具はあつちとくおびひり友鶴の  
 又置く夕露の秋よりもる。あつちの縁とく呼出られて誠の心操の具はあつちとくおびひり友鶴の  
 朝繪の尼が揺揚て敲た者。あつちの縁とく呼出られて誠の心操の具はあつちとくおびひり友鶴の  
 久う熟睡しけれ。あつちの縁とく呼出られて誠の心操の具はあつちとくおびひり友鶴の  
 せり。あつちの縁とく呼出られて誠の心操の具はあつちとくおびひり友鶴の  
 飲せえ侍仏堂の夜と共長物を。あつちの縁とく呼出られて誠の心操の具はあつちとくおびひり友鶴の  
 伴ひの夕餌も羞む。あつちの縁とく呼出られて誠の心操の具はあつちとくおびひり友鶴の  
 浅良井かあら。あつちの縁とく呼出られて誠の心操の具はあつちとくおびひり友鶴の  
 り。あつちの縁とく呼出られて誠の心操の具はあつちとくおびひり友鶴の  
 揺揚て誰がよくと賺。あつちの縁とく呼出られて誠の心操の具はあつちとくおびひり友鶴の  
 赴ける折ら。あつちの縁とく呼出られて誠の心操の具はあつちとくおびひり友鶴の



いりめく鎌倉より証使あり。とく出迎ぬむと頻に呼門罵る声判五の  
 へい曾ら騒だく。ある訝何れ七豫て案内もあつて夜門鎖る里の宿所へ  
 鎌倉より遙々と使使の來臨あるゆへ。あれも亦矢藤五が類ゆゆの  
 らん漫小門を推し死七朝夷ぬぬと報く且二三と出とせんとせよ。  
 僮僕共のさき益やと立騒ぐ程ゆゆ外右と和田新左衛尉常盛門  
 前の兼居る馬より閃と下る江三廣光と腰越獸六郎と相後へ進  
 る。裡面入りて幾十人。後者のゆゆ挑灯引提て前庭陟と  
 續たる。縛の勢ひ今あらう。ちの措へ死ぬぬ判五の一二共侶は衣裳を  
 更に出迎へ姓名を告り來意を問ふ。躬て客房の案内なる常盛(悠  
 然と上座を看く判五ホウち對ひ當所累世の里正とせえ。稻向判五の  
 はよる常盛の使と奉りて。あよ來るる別義ゆゆの嚮陸奥の戦ひ。

賊主経任を討捕て非常の功名隠れた朝夷二郎義秀の汝小由縁ある  
 のれゆ。奥よこの地の還れるを將軍家頼家 聞召れておとまれと仰る。  
 且件の義秀の乳名阿二九とぬき。ゆゆ父義盛の三男。此度ゆ  
 めく。ゆゆえなり。あつても阿二九の仙死時故ゆゆ姉母葉ゆゆとゆゆ抱き  
 逐電あつり。より廿年ちの月日と歴れゆゆの常盛ゆゆの老當腰越  
 獸六とせよ。その面影を認るもの。當時父が阿二九を取ら。俱利伽羅  
 とゆゆ名刀ゆゆり。今も遺失ゆゆ彼人これを持らんゆゆの疑ひゆゆの就く吉見  
 冠者の老當る江三廣光の義秀と疎ゆゆゆゆ亦由縁あるゆゆとゆゆ召  
 れゆ。冠者の執事居ゆゆゆゆとゆゆ格別の義をゆゆ。此度某ゆゆ隸らゆゆ。  
 義秀今宿所ゆゆゆゆ。この言をゆゆとゆゆ。判五二ホのゆゆ頭を  
 擡て常盛の後方る。廣光を稍見ゆゆ。疑ひ解けゆゆ笑まゆゆのゆゆ。



る。中も判五の額の汗を遠く拭く。謹で稟を奉り御説ふ。
 朝夷生の道中。所勞より。後日。程。義秀。衣。
 震を更。置襖の陰。進。出常盛。對。某則義秀。
 捨。既。詠意の趣。彼。承。不肖。某期。君父。
 兄。有。本意。稱。伯兄。の。使。立。
 られ。綬葛倒。掛。似。恐惶。相別れ。天。方朝野。
 刃を異。成長。父兄。面忘。疑。彼俱利。
 迦羅維の短刀。腰。この名刀の奇特。仇を殺。邪を。
 退ける。靈應。短。九寸五分の短刀。又長。

かん。欲。三尺許の大刀。鎌倉。日。大人。
 紛れ。名刀。某。衛育。彼妹母。
 頭。靈山。地を巡。圖。宿。後堂。
 中。渠。亦。正。誰人。某。陸奥の陣中。
 光仲。相別。鎌倉。光仲。義我。不測。咎。禁錮。
 せ。事。趣。初。傳。駭。嘆。これ。推。
 彼人々。冤屈。釋。友。垣。結。甲。斐。勸。某。
 及。近。首。途。致。と。折。の。使。出。船。追。風。
 如。飲。異。議。言。素。常。盛。亦。飲。
 當座。美。諾。某。面。起。飲。加。俱。利。迦。羅。
 某。證。批。分。明。誰。和。殿。父。



され少くもわき和殿軍功ありて鎌倉殿より微さをあへ必しも我が私  
 親疎は依る死の火のうらむ君の父の侍の死和殿を伴ふ旅され世も  
 けふ若とそ夜を犯しとまるとく準備をせりしとよ義秀一  
 謀及びもそのも仕ん切くこの曉まぐうち寛たぐ体ひるすとらむ  
 へば廣光も義秀判五二三ホは別れ後の情義を述べ義邦より贈り  
 する書状を義秀を遞与しけ當下腰越獣六郎とせうなぐは進せ  
 義秀は額とらた見覚へのましけれと某の御内人獣六郎とて恥  
 申したとせうむり大敷の仰を禀く和子と追蒐より金澤ある野を  
 苛と投しれゆひが長生しう甲斐ありと又いゆひ多りり稚死時の  
 勇力へ神まの憑とらんと思ひなりへ僻言あ果しく日本國中名  
 勇士まよりゆいた彼某ゆもあまをへ今宵の昔と語と笑るぐりゆん

のめでしと真実とらな解義秀微笑と結ひるたを稱けりて夜の  
 初更の鐘の音を判五二三共侶も義秀が袂を掖と誑使へ舎えよと  
 ほよ今宵のお宿と仕まへあわわり端近し南向の別席へとよを常盛  
 うちゆくその誤寔もあはべりこの曉も相共は必帰路を赴くべけれと西三  
 時の程より彼某ゆも對面しと来りてを同慰めん酒食の管むと  
 くと二郎も家尊の大人より贈りある二種の獣六郎掖露をせむと  
 つけ腰越獣六郎の外面も立出く両箇の奴隸が舁りて来る行筆司と  
 掖しと時服一領とら出らこれを縁頬よりと登せ常盛の若輩兩名  
 信濃驥の太く遅し三歳駒も金目磨る鞍置で真紅の厚總被るを  
 庭門より牽入ける當下腰越獣六郎の義秀より對ひく物云と謁ま  
 れば義秀は件の時服と二びうち戴なら東を向く恩と謝し馬と二三受とら



判五と共に常盛と小書院小誘引り。判五へ一三共侶猛酒食を  
 安排く常盛主後を款待し程は常盛亦某も對面くその誠忠と感  
 嘆し此度義秀の共は鎌倉へ行くもえんと。と叮嚀し勸めたる朝繪の  
 尼の後をむし和子と抱抱なく君所を去りゆりし朝繪御前の内送  
 言を空きせとらひ一故にれは殿史罪とゆべはとらふよをゆるるよ今も  
 然る外咎めなく和子の首途と立付けばこの年末の本意を遂に佛の道よ  
 入りより。下日也後世のいとも暇へ絶てまはりのをいぞ鎌倉へもあはれあ  
 よりやとせめとく。うけはくもあふりけり又廣光へ後堂ゆく浅良井小三は  
 對面し判五義秀一。其の妻子が寓居の終ぶを述て友鶴が死を悼と具鎌  
 倉の爲休養我邦光仲の喜の趣と詳報知しく既よの如くも華ひよ  
 ち朝夷ぬの此度彼地へ召れあへ遠くもてつる主君も恩免のゆはあ

主後安堵の日に至る。この厄會ホと迎とりて小三も大人あう吉九右と係  
 り。といふ浅良井小三亦脚直と慰め久後頼くをひける。この時朝繪の  
 尼も小書院より退れく又この團居よりし廣光の義秀の恩免の終びと述  
 る。この朝野義秀の討ひく菓二郎と太田の莊へ遣しる吉の顛末準が故ま  
 いと厚た心操とひり出る衆皆嘆賞せらるる。中判五へあひあひ朝繪の  
 尼より對ひてあ刃今尉殿の常盛鎌倉へ行くもえんと宣せしとけけり。さり  
 一ふのびや。然るが又脚く何れ杖を曳る中願ふも足と駐めて田鶴  
 媛を字育めひ其既友鶴と喪ひく又妻よと後れく。あめの子を誰か  
 ぬく。朝野育出た。この義秀よりけけり。又他支もまく苗るあを朝繪の  
 尼の沈吟くその宣よと。ぬくぬはははる。俗縁より苗られく孫女の衛  
 せの相応し。ぬ所行る。あふれども友鶴が艱育の恩もあへて中途

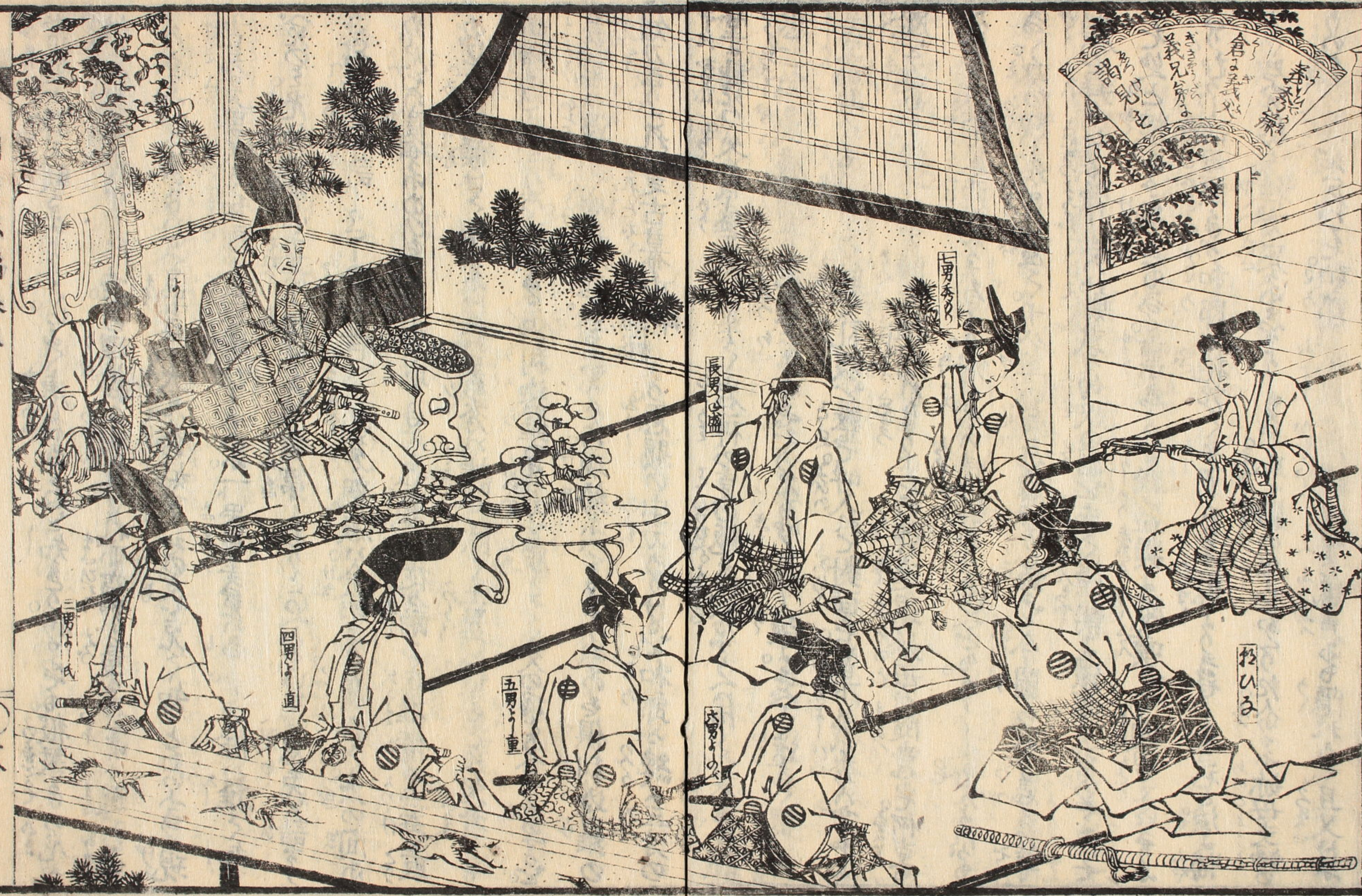












倉の義也  
義兄弟  
詔即

一男秀り

二男心盛

三男心直

四男心直

五男心直

六男心直

おひる

朝夷六部卷三



常盛が詳報するより、いふに虚名をぬき、知事たり。ゆゑその彼葉の尼が  
 誠忠男魂ののり、その理義を明き、これ亦竊小羞るを多かり。過六及  
 八、光仲の幸ひは、某に預け、て當第のり、とて、恩免を請う  
 吉見又田の人々、和郎が友垣、結び、の、一、下、器量、を、その餘、推、知、  
 光仲の幸ひは、某に預け、て當第のり、とて、恩免を請う  
 さ、對面と許し、常盛已下の兄弟親戚、今朝より、集合、次の間、  
 わんとの寛女、おのひ、先、不、取、を、と、童、扈、後、酌、は、立、准、備、の、王、器、と、取、  
 お、三、度、傾、け、け、け、け、け、け、義、秀、の、謹、で、飲、く、土、器、と、返、さ、と、た、又、有、も、  
 御、禮、見、た、と、い、ひ、つ、賈、多、俱、利、迦、羅、の、名、刀、と、脱、と、り、く、父、の、母、と、り、へ、う、ま、さ、と、  
 義、盛、の、遠、く、受、戴、た、と、い、ひ、つ、現、紛、ふ、も、ゆ、め、を、俱、利、迦、羅、の、  
 短、刀、の、これ、是、古、幕、府、頼、朝、より、恩、賜、の、宝、刀、を、け、と、和、郎、が、練、三、才、の、

秋、病、より、只、管、小、法、師、お、ま、く、と、ひ、て、戒、刀、お、と、く、取、り、せ、し、母、の、  
 柄、繪、と、喪、ひ、の、和、郎、之、往、方、の、ま、れ、む、り、り、る、を、行、心、を、う、そ、れ、後、と、  
 つ、見、と、この、宝、刀、と、功、成、名、遂、く、と、り、本、お、吉、事、へ、と、先、の、凶、事、に、成、れ、り、  
 世、の、塞、羽、が、馬、多、の、い、く、松、藏、の、い、く、感、涙、數、行、お、及、び、つ、を、伏、室、  
 刀、と、返、し、け、り、父、子、の、献、酬、を、支、單、と、し、常、盛、も、亦、吹、め、く、不、盡、と、し、程、間、の、  
 隔、亮、と、推、岡、は、く、二、男、二、郎、左、衛、門、尉、義、氏、四、男、四、郎、左、衛、門、尉、義、直、  
 五、男、五、郎、兵、衛、尉、義、重、六、男、六、郎、兵、衛、尉、義、信、七、男、七、郎、秀、盛、八、男、  
 八、郎、義、國、嫡、孫、右、兵、衛、尉、朝、盛、の、子、後、父、弟、住、柄、平、太、治、長、  
 本、と、初、と、く、三、浦、土、谷、山、内、波、谷、横、山、茂、利、の、親、族、外、戚、如、陝、身、を、進、  
 入、る、く、食、義、秀、小、對、面、と、し、終、ひ、を、述、向、後、と、契、を、く、又、献、酬、は、時、を、授、  
 亭、午、の、比、よ、り、け、り、これ、より、先、と、義、盛、一、箇、の、家、隸、と、執、權、時、政、の、宿、



遣<sup>つ</sup>と常盛越<sup>の</sup>の岩神<sup>より</sup>の義秀<sup>と</sup>の<sup>ゆ</sup>ゆの<sup>より</sup>云云と報知<sup>せ</sup>る<sup>の</sup>使<sup>者</sup>  
 者程<sup>も</sup>ま<sup>る</sup>る<sup>の</sup>志<sup>を</sup>朝夷<sup>殿</sup>の<sup>おん</sup>の<sup>御</sup>所<sup>の</sup>山<sup>ゆ</sup>は<sup>は</sup>依<sup>又</sup>又<sup>江</sup>三<sup>廣</sup>  
 光<sup>の</sup>の<sup>舊</sup>の<sup>如</sup>く<sup>在</sup>柄<sup>平</sup>太<sup>は</sup>預<sup>け</sup>置<sup>ひ</sup>と<sup>おん</sup>下<sup>知</sup>の<sup>ゆ</sup>ゆ<sup>の</sup>義<sup>盛</sup>則<sup>則</sup>  
 廣<sup>光</sup>と<sup>勞</sup>や<sup>く</sup>客<sup>房</sup>や<sup>く</sup>酒<sup>食</sup>と<sup>羞</sup>め<sup>更</sup>又<sup>一</sup>箇<sup>の</sup>家<sup>隸</sup>は<sup>難</sup>色<sup>奴</sup>隸<sup>と</sup>  
 さ<sup>し</sup>副<sup>の</sup>廣<sup>光</sup>は<sup>相</sup>具<sup>して</sup>在<sup>柄</sup>の<sup>宿</sup>所<sup>へ</sup>遣<sup>は</sup>程<sup>は</sup>胤<sup>長</sup>も<sup>亦</sup>人<sup>々</sup>先<sup>ち</sup>  
 七<sup>帰</sup>り<sup>け</sup>る<sup>の</sup>車<sup>一</sup>程<sup>は</sup>柳<sup>營</sup>の<sup>走</sup>卒<sup>小</sup>壺<sup>の</sup>濱<sup>の</sup>假<sup>屋</sup>より<sup>相</sup>州<sup>時</sup>の<sup>奉</sup>  
 署<sup>者</sup>と<sup>く</sup>一<sup>通</sup>ど<sup>の</sup>と<sup>来</sup>ま<sup>け</sup>り<sup>義</sup>盛<sup>即</sup>披<sup>た</sup>る<sup>る</sup>小<sup>義</sup>秀<sup>今</sup>朝<sup>矣</sup>著<sup>者</sup>の<sup>ゆ</sup>ゆ<sup>の</sup>  
 常<sup>盛</sup>と<sup>多</sup>く<sup>渠</sup>は<sup>也</sup>小<sup>壺</sup>の<sup>假</sup>屋<sup>へ</sup>ま<sup>る</sup>者<sup>の</sup>執<sup>連</sup>件<sup>の</sup>如<sup>し</sup>五月<sup>廿</sup>四<sup>日</sup>  
 と書<sup>れ</sup>り<sup>義</sup>盛<sup>を</sup>常<sup>盛</sup>及<sup>義</sup>秀<sup>を</sup>ま<sup>る</sup>せ<sup>り</sup>先<sup>復</sup>翰<sup>と</sup>進<sup>し</sup>の<sup>躬</sup>  
 父<sup>は</sup>使<sup>と</sup>返<sup>し</sup>程<sup>は</sup>常<sup>盛</sup>も<sup>義</sup>秀<sup>も</sup>猛<sup>は</sup>衣<sup>裳</sup>と<sup>整</sup>へ<sup>く</sup>各<sup>々</sup>後<sup>者</sup>を<sup>俱</sup>  
 父<sup>は</sup>辞<sup>し</sup>と<sup>歩</sup>ま<sup>り</sup>小<sup>壺</sup>へ<sup>ま</sup>り<sup>け</sup>り<sup>義</sup>盛<sup>を</sup>目<sup>送</sup>り<sup>と</sup>二<sup>郎</sup>か<sup>け</sup>着<sup>て</sup>

は<sup>將軍</sup>來<sup>の</sup>見<sup>參</sup>入<sup>る</sup>の<sup>ゆ</sup>ゆと<sup>速</sup>る<sup>入</sup>吉<sup>事</sup>の<sup>ゆ</sup>ゆの<sup>吉</sup>事<sup>も</sup>人<sup>定</sup>は<sup>加</sup>賀<sup>と</sup>  
 へ<sup>加</sup>賀<sup>と</sup>と<sup>い</sup>ひ<sup>の</sup>と<sup>ち</sup>合<sup>味</sup>と<sup>越</sup>路<sup>の</sup>供<sup>は</sup>立<sup>り</sup>ける<sup>腰</sup>越<sup>獸</sup>六<sup>亦</sup>初<sup>す</sup>と<sup>す</sup>  
 送<sup>る</sup>酒<sup>も</sup>ち<sup>飲</sup>り<sup>義</sup>秀<sup>が</sup>吉<sup>左</sup>右<sup>と</sup>今<sup>々</sup>と<sup>俟</sup>り<sup>け</sup>る<sup>時</sup>將<sup>軍</sup>賴<sup>家</sup>卿<sup>の</sup>  
 色<sup>と</sup>好<sup>む</sup>酒<sup>と</sup>嗜<sup>む</sup>歌<sup>舞</sup>蹴<sup>鞠</sup>の<sup>遊</sup>興<sup>は</sup>夜<sup>と</sup>り<sup>日</sup>は<sup>繼</sup>だ<sup>め</sup>の<sup>ゆ</sup>ゆの<sup>時</sup>  
 富<sup>士</sup>足<sup>柄</sup>の<sup>山</sup>獵<sup>は</sup>ゆ<sup>ぐ</sup>の<sup>見</sup>込<sup>り</sup>又<sup>ゆ</sup>と<sup>小</sup>壺<sup>金</sup>沢<sup>の</sup>漁<sup>獵</sup>は<sup>日</sup>と<sup>消</sup>る<sup>も</sup>  
 放<sup>逸</sup>嗜<sup>欲</sup>を<sup>限</sup>り<sup>も</sup>ま<sup>け</sup>る<sup>の</sup>日<sup>は</sup>北<sup>條</sup>相<sup>模</sup>々<sup>義</sup>時<sup>仁</sup>田<sup>四</sup>郎<sup>忠</sup>常<sup>比</sup>金<sup>次</sup>四<sup>郎</sup>  
 郎<sup>小</sup>坂<sup>太</sup>郎<sup>富</sup>部<sup>五</sup>郎<sup>毘</sup>田<sup>八</sup>郎<sup>多</sup>と<sup>親</sup>近<sup>習</sup>と<sup>おん</sup>供<sup>あ</sup>く<sup>小</sup>壺<sup>の</sup>濱<sup>の</sup>金<sup>次</sup>  
 の<sup>浦</sup>人<sup>は</sup>網<sup>を</sup>引<sup>て</sup>禽<sup>し</sup>る<sup>け</sup>る<sup>風</sup>波<sup>不</sup>順<sup>の</sup>故<sup>あ</sup>り<sup>け</sup>ん<sup>獲</sup>物<sup>の</sup>難<sup>魚</sup>不<sup>不</sup>  
 る<sup>ゆ</sup>ゆ<sup>おん</sup>氣<sup>色</sup>よ<sup>ろ</sup>の<sup>ゆ</sup>ゆ<sup>これ</sup>は<sup>是</sup>遊<sup>獵</sup>の<sup>甲</sup>斐<sup>も</sup>ま<sup>る</sup>と<sup>潛</sup>没<sup>さ</sup>白<sup>水</sup>郎<sup>は</sup>  
 仰<sup>て</sup>石<sup>漢</sup>明<sup>榮</sup>螺<sup>と</sup>捕<sup>ま</sup>り<sup>ま</sup>る<sup>ゆ</sup>ゆ<sup>を</sup>の<sup>ゆ</sup>ゆ<sup>義</sup>時<sup>忠</sup>常<sup>奉</sup>て<sup>浦</sup>人<sup>は</sup>  
 呼<sup>ぶ</sup>と<sup>縛</sup>云<sup>と</sup>分<sup>付</sup>果<sup>浦</sup>人<sup>は</sup>困<sup>ト</sup>果<sup>御</sup>誅<sup>で</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>今<sup>の</sup>小<sup>壺</sup>の







底は潜り入りて誰より彼解と殺さぬ忽地その腹中を葬られる疑ひを浦  
 平の吉備への海ありて公將塔が悪魚の命と隕まも只是過世の業報  
 ありしに夫婦同胞うちも揃て命運薄く非命は終を取ると怒り  
 ありし左右神は落涙と押拭へ衆皆のあれもいふも義時忠常御説と  
 傳へ催促をくもりければ緯云云と喧えあひ浦太郎と扁舟に乗して先んや  
 瀬へ出ると準備も暇な折々傳告の青侍海假屋は走り去り和田  
 常盛召ふより朝夷三郎義秀とわくありぬと喧えあひと頼家も  
 多ひく義秀欲す不承り常盛共侶るる召べ潜波の枝に今要時後ふ  
 そろそろ孔浦太郎といふれをの假屋の舟より舟置しての餘のれい且退  
 せよとどりそがへ近習の輩ありぬと云々と相計は朝夷邊と俟程  
 和田新左衛門尉常盛義秀と相具してとるや内假屋は走り去り頼家

和と御覽と新左衛門尉遠路の使節速に弟をいれ多事有る神妙あり  
 現義秀が面魂勇力もさあつての格有力と試みぬ角舐の勝負は優  
 り誰よりとの濱邊ゆく義秀と雌雄を決せん角舐はあつてさるのハ  
 ともゆきと仰されども豫てより義秀の勇力武藝は耳に聞かざりし  
 らんといふれありて遠巡とまのさるればい側はゆりたる義時とれを原目  
 進と對ひく稟せやう義秀の之雙の勇士武藝も又煉熟とれは角舐の  
 枝も長るべし其れ多供の杜枝木は渠が敵もあつたのれありし見ゆ  
 但し常盛も亦坂東あり二を争ふ勇士も角舐のりも多し好そく  
 ようのと喧えあひありれこの兄弟は立ちあへるや下は真も深き  
 も果ぬ頼家卿も合笑り領死あひくその一敗を候とてとて  
 がめぬ義秀は後ひきと義時と對ひく御説を辞しなるといふ



惶恐くはども角能く勝負の烈しき兄弟の勝敗の人情の害なり。  
 倘其が諺て常盛の勝つる長少の礼是より乱るる兄弟の闘争の基致  
 この美の聴きとていふと憚る氣をもさし論じまじはる頼家卿の御心  
 所理のふ似れど大凡君は仕るれば私親のく辭さるべしといふも  
 一時の興りの然るを推辭のえらるるを勝負とていふは立合せ  
 やと焦燥の義時忠常辭を盡しとて如く懇切の仰と固辭を  
 至礼に枉ぐ諛意の後ひかされて義秀脱る路なきまかりあつる美服  
 ちと立のうんとしてけるを頼家要時と弟のせで久兼替の駿足と假屋の  
 同りの牽出さうと指し示し宣ふ常盛義秀彼とて抑彼駿馬の  
 近死比官令廣元が進ませし鮮明月毛と名づけり特小愛まるとはされ  
 ども秘物と牽いたのこれを心の熨めり勝負とていふと仰まはる常盛

義秀阿とたよりふ答あうしく遽くおん前を退る御假屋の前面の濱の  
 真沙路に立坐る衣裳を脱て砥削松の枝の肉とち被もて數名の雑色  
 沙石を集めて俄頃小土俵を造り出し小坂太郎の仰と京く行司の役あて  
 候しけるやて兄弟東西の立つるれ土俵の中に進み入りて呼吸を揃り虚実と廻ひ  
 要時盤桓の程もゆせば忽地行司が引く團扇と共に齊一引組り常盛  
 豫てより鮮明月毛を渴望の折もあうとて乞なりてまう賜ふとあふり  
 月であらるり一パイの管は勝負と好ま振倒さんと角へども美義秀の此の動  
 きを吐裏ふと思ふこれ今家兄と搔擽て投入の難を祈為るる然るも  
 つら面目でおれ兄の為にあつた取るまゝおれども初見まはる將軍の  
 久目前ゆく兄をいかに譲やと負ふおれ兄のあつた懐煩るれども生涯の瑕  
 瑾るる一所詮勝を肩負はんと時と稔まはるる正おれと守忠と勝負を



好まじ組方腕を振解て反久しう反久され又引組振ほぐ互の秘術由々  
 實々踏鳴らちち足は大地のあちこち滅凹まき接あさる半响なり勝  
 負も果あせりる久く君臣死醉るがごとく人名も器具手拔手大隅隼人  
 阿多隼人野見宿禰蹴速まりとも。これあつる優へ死せとて且感下且呆  
 れて瞬もせ目成りり。當下行司小坂太郎の假屋のかふちち對ひて跪坐  
 して声高か小既小肉する如く優劣する。一時と程せの疲勞もさすをぬる  
 べ死候と伺ひ義時時てうち領死西龍雲間を闘ふと。鱗と陸さるること。兩  
 虎肉と争ふと死に一虎は必傷くと。左も右も勝負のあつたごとく。口  
 いへとのま小坂の旨を傳へく常盛と義秀と東西に引合ふ。且く息哉吻せ  
 けり。あつるはゆる為体は頼家御感大くさる。當座は勝負する。といへ  
 ども駿馬の同胞は賜るべけれ。兄まれ弟まれ望るのれと取れ。いと仰も果

常盛義秀の赤禰より。件の馬は倏忽閃のとうち乗り。馳せんとまは程小  
 常盛大く驚駭だく。馬の尾毛と杖と取り引矢えんとし。けを義秀透  
 さす馬小拍入れ。一中礮とあつる。馬の尾頭を引断離く。海へ入と  
 馳入り。常盛これを追んとまふ。水戯未熟るを。推つたて。水小ぬ入  
 らむ。岐打隠る。と抗く返せくと呼れとも。義秀秀の耳も。うけ。安房の海  
 邊。成長りて水戯水馬は自由とぬ。これ馬の平頸うち。越も可の波も風も  
 物ともせ。遙前面の澳中。顕れゆる。高出巖。乗るんと。恣せり。君臣  
 更ふ。これを。速騎。馬もより。彼巖。坂東道。二十四里。一里。こもや  
 わん。飲と。ゆ。び。血。七。入り。の。浩。如。い。と。大。死。る。鰐。の。波。を。蹴。立。て。義。秀。が  
 乗る馬の後方より。まの。め。ると。え。え。り。馬。の。忽。地。骸。骨。を。後。足。ら。け。く。噓  
 断。き。けん。を。こ。う。の。潮。水。の。鮮。血。小。変。じ。て。嘶。た。あ。む。ま。り。共。は。波。の。底。を。論。じ



ける。あつては形勢小君臣忽地真醒る。われよくと叫ぶ。五六十町ある。
 る。澳のわがはる。故よは術もろりけり。是より先は常盛の遠く夜
 裳を着る。きりうゆいば澳のく。ち眺めく。わろ。件の緯の景迹。
 の。この。駭憂ひて。義時忠常ホと商量。又浦人を呼聚合。切く
 中が亡骸。りとも。船のく。撈ま。せ。く。を。程は。義時
 波の底。十四五町。や。潜り。あ。け。忽地。波上。は。浮。出。り。と。大。死。る。兩。隻。の
 鰐。と。左。右。は。楚。と。抱。絞。て。水。際。へ。囚。死。せ。り。と。休。ま。づ。り。濱。邊。の。も。と。あ。
 件。の。鰐。と。投。出。ま。は。海。内。を。雙。の。大。力。ま。は。抗。を。扼。れ。を。け。り。鬼。音。の。等
 一。死。巨。鰐。も。れ。も。血。を。吐。く。と。駭。く。僅。く。四。足。を。動。ま。の。と。又。生。へ。り。も。り。ふ。り
 君。臣。ら。ち。え。く。舌。を。吐。れ。駭。嘆。せ。り。と。い。は。れ。り。と。の。鰐。の。大。死。る。と。一。隻。の
 八。尺。の。り。る。く。一。隻。も。此。一。芥。も。り。是。る。免。郷。向。は。浦。人。ホ。が。雌。雄。二。隻。の

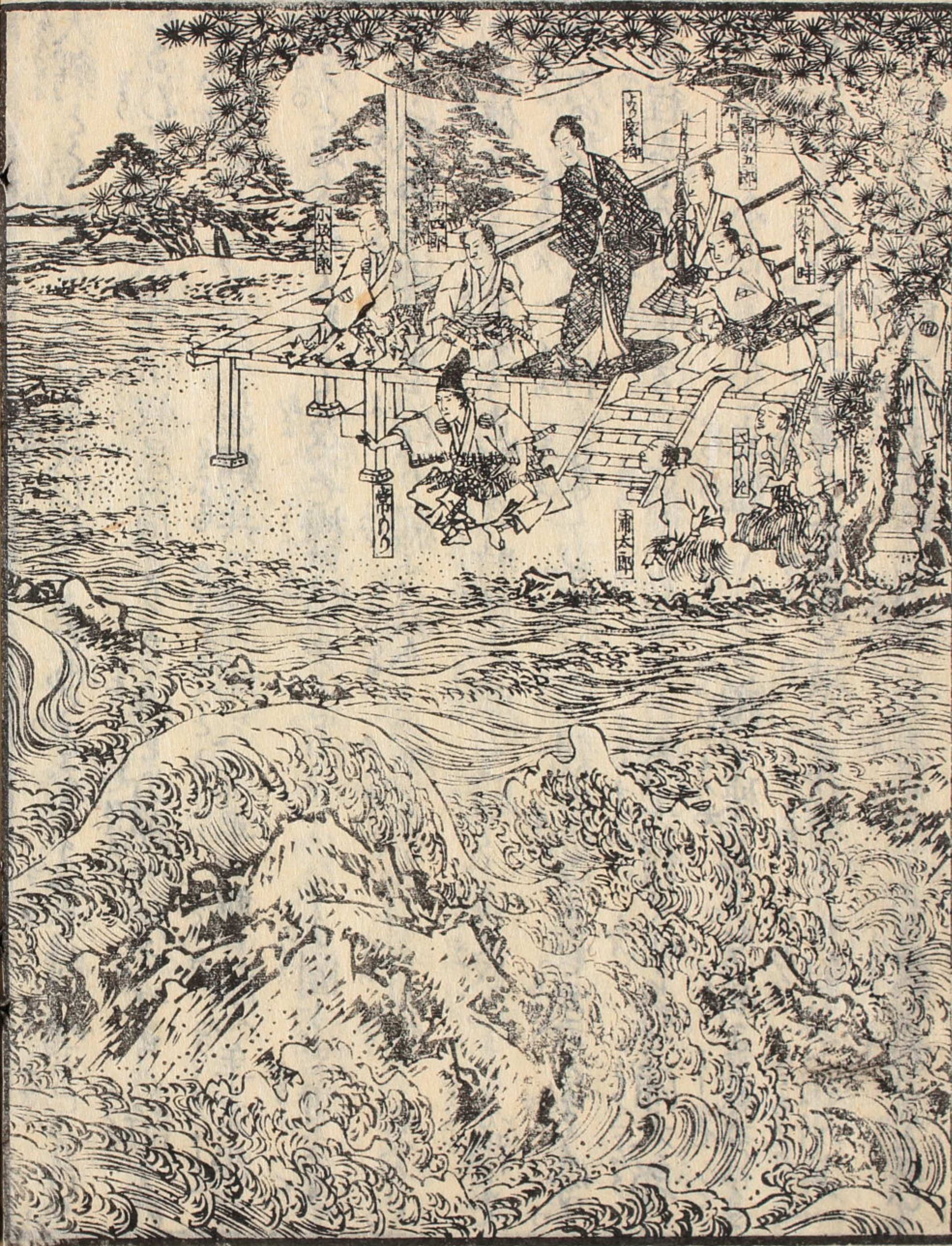
大鰐とく。怕る。の。れ。は。疑。ひ。る。き。も。く。と。ま。り。の。要。時。へ。鳴。も。已。り。け。り。
 ぬ。ら。り。浦。太。郎。の。假。屋。の。向。り。より。進。み。出。跪。坐。せ。り。と。許。す。
 中。郷。向。より。上。へ。り。と。この。鰐。共。の。僕。婦。父。浦。平。が。雙。言。敵。へ。年。末。怨。を
 復。ん。と。思。ひ。け。り。と。及。び。鬱。憤。か。り。も。る。ひ。ひ。は。圖。ら。ば。男。士。の。身。を
 借。り。風。志。を。遂。る。と。を。い。う。願。ひ。の。只。今。の。悪。魚。を。一。大。刀。刺。し。ぬ。へ。り。
 と。又。他。の。も。る。く。を。ま。ま。と。義。時。時。々。眼。を。睜。く。見。奴。匹。夫。の。分。際。を。
 御。所。の。お。目。前。も。も。憚。り。な。ら。む。鰐。の。妻。親。の。仇。を。ま。ま。と。云。云。と。す。ら。ぬ。り。
 身。の。程。あ。り。ぬ。白。物。も。り。と。罷。り。直。ま。ま。と。辨。尖。鋭。く。叱。ら。れ。て。浦。太。郎。の
 阿。と。ま。り。ふ。忘。れ。ま。れ。ど。立。難。く。沙。は。額。を。瘞。て。せ。り。その。間。は。義。秀。の。身
 名。を。濡。る。身。を。拭。き。遠。く。衣。裳。を。被。り。義。時。より。對。ひ。て。相。州。某。一
 言。の。り。の。浦。太。郎。の。匹。夫。も。れ。も。婦。父。の。為。に。怨。と。ある。鰐。を。殺。せ。ん。と。思。ひ



こつと  
 小壺の  
 海よ  
 義秀  
 雄の  
 鰐  
 を  
 捕  
 る  
 ま



月夜六編卷二



朝夷六編卷二

廿五



事年事を麻あ志しの根ねらひて今いまああ咎とがもも々々へへでで一一大大刀刀刺刺んと  
 箕この便べん是これ義ぎ夫ふのああままや編へん蓬ぼうの中なかゆゆかかの如ごとに義ぎ夫ふのああままの士し風ふうを  
 起おこす後のち々々もも美ひ談だんととああべべ一一鯿ぎよの某あがが捕とらまませせ一一恩おん賞しょうふ請こう  
 多く今いま此こ浦うら太た郎らう刺さままべべ一一を不ふ敬けいとせせられらるるそのああ咎とがめめ某あがが牙が  
 ひらひらああのんのんのの此こよよままささめめうう一一と辭ことせせりり理りを推おしし浦うら太た郎らうままち  
 對むかひひ汝なが所ところ願ねがひひの義ぎ夫ふ稱なへへりりこれこれををせせめめひひのままささ刺さすす怨うらみみを復かへへりりとといいひひ  
 大おほ刀やいばをを使つかままししけけるる浦うら太た郎らう勢いきほびびくく刃やいばを引ひ拔ひきき登のぼりりかかららくく偏ひと息そるる両ふた  
 隻つの鯿ぎよのの呪のろひひののを刺さんととほほるる皮かわ堅かたくく刃やいばを受うけけ入いりり刃やいば尖とがを口くち中ちゆうへ突つ  
 つつららぬぬききぞぞ刺さしし當あたりり浦うら太た郎らうの單ひと衣えの袖そでををりりて刃やいばの鮮あ血ちを拭ぬぎぎ  
 去さりりくく靴くつは納おめめくく義ぎ夫ふ返かへりりくく要あ時とき額かぶととりり又また脚あし假かり屋やののまま向むか  
 ひひくく額かぶつつたた拜かりりくく邊へへへくく舊ふるの如ごとに退ひれれりり頼たの家けこれこれを御ご覽らんととてて躬かみくく

常とこ盛もり義ぎ秀しゆとと母ははととり近ちかくく召よびびて汝な達たちが角かく鯿ぎよのの段だん何なにを兄あにととせんせん何なにを弟あにととせんせん絶たくく甲かひひるる死しのの就す中ちゆう義ぎ夫ふ秀しゆのの水みづ戲あそ水みづ馬うまの衆しゆう人ひとは捷あれれるるままをを  
 毒どく龍りゆうゆゆももととききくく劣おららぬぬ山やま隻ひとの鯿ぎよと水みづ中ちゆうにに輒あららずず捕とらままるるるる文ぶん学がく武ぶ  
 其その藝ぎをを左ひだりのの彼あららるる唐たう朝てうの韓かん退たい之の功こう徳とくは伯はく仲ちゆうととりり既すでにに祿ろく物ぶつとと  
 牽ひくく鮮せん明めい月げつ毛もうのの惡あく魚ぎよのの傷きずけけららるる底そこのの水みづ屑くずととりりくく更さらにに又また座ざ  
 右みぎのの鏡かがみ一ひと具ぐと取とりりて常とこ盛もりのの近ちかにに日ひのの駿うま馬うまををええててみみくく賜たまひひ又また彼あららるる浦うら太た郎らう  
 郎らうとといいふふ漢かん夫ふが鯿ぎよを刺さんと願ねがひひのの志こころ神かみ妙たえききのの志こころ漁いさな獵あのの便べん著あるるををひひて  
 小こ童どうの浦うら人ひと安やす堵とせせ比ひ皆みな義ぎ夫ふ秀しゆのの功こうととああららんん鯿ぎよのの翌あすす日ひのの同どうのの死しはは榮えい四し罰ばつ  
 してして衣い衣いををせせりりむむ昔むかしああらら浦うら正ただにに仰おほまますす一ひと日ひももをを西さいにに没ぼつんととせせられられればばの  
 遊あそばばのの是これままをを義ぎ夫ふ秀しゆのの常とこ盛もり共とも侶りよ今いま宵よにに且かつ宿しゆく所ところは退ひりりて翌あすす日ひのの營えい中ちゆうに  
 仕つかへへよよああららるる飲のみみとと可か嗜しふふ時ときををああららせせくく黒くろ草くさ威いのの鏡かがみ一ひと櫃びと賜たまひひ



誘之らんとしてせむ。其時忠常以下の近臣雑色奴隸に至るまで前駆後  
 後の隊伍を整先追ひまゝ警蹕の声しきりたる黄昏時陸續して齊々  
 たり。尚ほ常盛義秀の濱邊より一跪坐し恩を謝し拜別れて目送り  
 なること半响なり身を起さんとしてける。浦太郎の程ある浦太郎も膝折俯く後  
 方ふり義秀が袂を引く朝夷大人悼り多し等せむ。郷内より死を好  
 情なく鯨を刺す。鬱憤と散らる。終ひの辭も盡し。其の死を  
 をとらん。僕陸奥ゆく大なるぬれ恩を稟る。彼菅原三郎が異父兄  
 弟小名穂之助とゆれ。め之就く。親中ゆげ。死一條のゆ。且く苗  
 里あり。又他ももくひあまけり。畢竟浦太郎が義秀を請留  
 めく。又甚麽も。話説りゆ。その次の巻は解分るを知らん。

朝夷巡鳴記全傳第六編卷之三終

泉岸 思之中村貞纂述  
 同 博愛真田頼閣正

頭書 小學作文教授書 全五冊

此書ハ先生曾テ學校巡回ノ際各校生徒ノ進歩推リ作文ノ諸科ニ  
 後ルテ憂ヘ其教授ノ順序ト方法トヲ講究シ其秘訣ヲ實地  
 ニ試ミ其效アル俗文要語活用問答今正誤文俗文復説法等各若干ヲ  
 初卷ノ首ニ掲ゲ次ニ作文教授法ヲ説キ日用短簡文一百餘章ヲ編ス  
 次卷ハ首ニ俗語釋義ヲ編シ揚ゲ次ニ四季贈答文祝賀慶弔文電信文公  
 用願文諸証文等ヲ編ス。第三卷首ニ作文要字(助字)和辭ヲ掲ゲ  
 次ニ方合(流行)ノ雅文ニ俗語ヲ神ニ僅ニ三十版(格)字内外ヲ以テ一  
 ヲ成ス。至テ短キ未嘗有ル。極面白キ。凡餘百餘章ヲ編ス。第四卷五  
 兩卷ハ首ニ漢文要字(助字)虚辭解ニ用ル。類書及註相號ヲ示シ次ニ記  
 類(事)論(賞)銘(題)序(祝)文(祭)文(等)ノ作例數百ヲ編シ其文ノ種  
 類ニ依リ其趣意ト作方ヲ示シ。假名ヲ以テ訓解ヲ施シ教授且獨學ニ  
 便ス。毎卷ニ作例及ビ類語ニ假名ヲ以テ訓解ヲ施シ教授且獨學ニ  
 テ其言ノ誣ヒガルヲ知り玉ヘ。大阪堂宝寺町四丁目 前川源七郎敬白



